歩いて発見。津の魅力

168 歴史散歩

賢明寺と久居藩

久居元町にある川併神社の南の三差路から市道を南に進み、狭い道を西に進むと、正面に朱色の賢明寺の山門が見えてきます。由緒書によれば、賢明寺は天平年間(729～749年)に行基により創建され、戦国時代の兵火で荒れ果てていたものを、寛永年間(1624～1644年)に当時の住職である実順が再建したといわれています。

山門は２階建てで、間口が三間あり、その中央が戸口となるいわゆる三間一戸の楼門と呼ばれる形式のもので、津市の有形文化財(建造物)に指定されています。山門の左右には高さ約2.25mの仁王像が立ち、その後背には高さ75㎝ほどの増長天・毘沙門天像が安置されています。建築されたのは、構造や飾り物の様式などから元禄年間(1688～1704年)と考えられていますが、軒を支える上層の組み物は法隆寺などの古い様式を模しており、特徴的な組み方になっています。

山門を通り、左手に目をやると山門と同じ朱塗りの手水舎が見えます。この手水舎にある水盤には、貞享２(1685)年３月18日という日付と寄進者の名などが刻まれています。境内にはこのほかにも、同年に製作された市指定有形文化財(工芸品)の銅灯籠や、津の鋳物師の辻陳種・政種が元禄２(1689)年に製作した梵鐘などがあります。これらはいずれも1669年に久居藩初代藩主となった藤堂高通公の時代のもので、その頃に境内が整備されたことが分かります。

山門をはじめとするこれらの文化財は、周辺の景観と一体となり、久居藩が成立して間もない頃の様子を現代に伝えています。

手水舎にある水盤

賢明寺山門